

## 『立命館平和研究 別冊』の刊行にあたって

高杉 巴彦（立命館大学国際平和ミュージアム館長）

立命館大学国際平和ミュージアム紀要『立命館平和研究』は毎年度末に発行され、2007年の第8号から研究誌としての性格を強め、第9号からは投稿規程や査読体制を確立してきた。それは国際平和ミュージアムが、社会に開かれた展示施設としての博物館であるとともに、学園の平和教育センターとしての役割や国際的な平和研究センターとしての方向性を求めていることであった。

その大きな画期となったのが2008年10月に、当館が京都造形芸術大学や広島平和記念資料館とともに開催した第6回国際平和博物館会議であった。世界の平和博物館の理論的・実践的到達点を踏まえて、「ピース・リテラシーの構築」「戦争と悲惨さの博物館から和解と共生の平和創造の博物館へ」というテーマを中心に、さまざまなスタイルの平和博物館の創設や営みが議論された。

その世界会議の準備過程で、今回別冊論稿の筆者の一人福島在行氏は大会準備作業に深く関わり、藤岡惇氏が委員長を務める大会プログラム委員会の中心的メンバーとして会議の成功に大きく寄与された。大会準備委員会は2007年春から開催され、プログラム委員会は2007年の夏から協議を開始した。国際会議で協議するテーマと報告内容、とりわけ分科会の構成決定とその報告者の選定を、世界の研究や実践の動向を考慮しながら進めることがプログラム委員会の大きな役割であった。

国際会議までに19回、多い月は毎週のように開催された委員会の作業過程で、平和博物館の定義、平和博物館のあり方を検討する視角、体験の継承や戦争の記憶、地域・社会の中での役割、平和のための教育や文化との関わり、和解と共生・平和創造の営みに果たす博物館、平和に関する展示のあり方と表現、新しい平和博物館建設動向など多岐にわたる課題が議論された。

こうして、大会準備作業過程であらためて今日の平和博物館の課題についての検討・整理が必要とされ、準備作業と並行する形で進められたのが情報・文献・資料の調査・収集であり、国際会議終了後に追加収集されたものを含めて、「平和博物館」についての研究動向を福島氏らが精力的に整理し論考を行ったものである。

したがってこの成果の発表にあたって、紀要『立命館平和研究 別冊』という形を採用した理由と意義もここにあるもので、「平和のための博物館」についての研究史整理のみならず文献リストとしても、若手研究者をはじめとして大いに活用されることを願っている。